



浦 隆一
かくれんぼ

人間のような人形のような、子供のような大人のような人物達が、狭い空間に閉じ込められて遊んでいます。でも、狭すぎて思うようには遊べないようです。現代日本の不安定な一面を描いて20年以上がたちます。10年前、20年前より不安定感が増してきたような現在を、面白く見える絵の中に表現できればと思い制作いたしました。

この絵の技法は、パネルにキャンバスを張り日本画の天然顔料を使ってテンペラ絵の具を作り、油絵の具とアクリル絵の具を併用して描いています。地塗りから始めてじっくりと描き込み、完成まで約4ヶ月かかりました。



関 秋宏
2011年春

厳寒の地旭川で、3月の初めから制作を始めました。制作開始後すぐに東日本大震災が起きました。

福島に嫁いだ娘は放射能の影響を懸念し、幼い子供を2人連れ震災直後から我が家に避難してきています。

私が子供の頃、日本は戦争のさなかでした。東京で空襲に遭い北海道に来ましたが、辛い生活の中で「戦争を始めた大人が悪い」と母を責めたことがありました。今は、原発を許した世代としての自分を悔やみません。

次世代への希望を若いモデルに託し、立像としての生命である「立つ」事に執着し制作した作品です。



板津 邦夫
北風

いい歳をして恥ずかしいことを報告します。

八月中に作っていた作品がなかなか気に入らず、気がついたときには失敗していました。

その代わりに出品しようとした1メートルほどの高さの作品は、つなげていた部分が壊れてしまいました。

最終的に出品することになった作品は、ナラの厚い板の交叉した面に、小枝のような細い木を組み合わせ、アクセントをつけようと思いましたが、充分にいったでしょうか？

エネルギーに満ちあふれた作品を志さないと駄目です。もう少しロマンのある形態を制作したいと思っています。



児玉喜八郎
初冬の農家

私の場合、絵を描く発想はいたってシンプルです。作品全体のイメージを前もってある程度計画し、予想はしているが予想通りに作品が出来ることはない、いつも絵を描きながらイメージを複合し、作品に新たな構想を与え、そこから制作の苦悩とある程度仕上がった時の面白さが伝わってくるのです。次作の構想にも影響を与えながら描くことが、私の原風景につながっているのです。



香西富士夫
影=なすむ

人物の群像をモチーフとして、バランスの取れた構成と青の変化を狙って描いた絵です。

テーマは、人間それぞれが持っている感情を、静かな眼で見詰めて微妙な動きを捉え、“人間喜劇”の舞台を演出しようと考えた作品です。

本作は特に人間の影の部分に焦点を当ててみました。人間の表面に現れた喜怒哀楽などの感情とは別に、裏面（影の部分）に隠された心の葛藤に深い意味が有り面白味もあります。影の空間から感じ取る何かは、観る人それぞれ違って構いません。想いを膨らませて下さい。狙いが通じると嬉しいのですが。



川畑 和江
老木—2011—

十数年前の3月、倉敷市連島町西之浦^{つらしまちうにし の うら}という田舎で美しい桜に出逢いました。高台にある籠取神社^{かごとり}をお参りしようと、細く長い階段を登り急な坂道の回廊を通り抜けた先に、春の柔らかい風を受けている竹林とソメイヨシノが眼下に広がり、平安絵巻の様な風景が現実としてそこに在り、若き日に見たであろうこの風景を今は年老いた母に見せたいと思いました。

この時の感動から桜を描くようになりました。スケッチを繰り返す内に、剪定された梅の枝の面白さに導かれて、桜・梅の木が私のモチーフになりました。

「花咲き咲き成就、花散り散り成就」今回の作品は母との思い出を桜に借りて描きました。



千代 明
波の記憶

今回の作品はカンヴァスの平面の支持体にポリエステル樹脂（ポリパテ）でモデリングしてマチュールを作り、その上に厚紙、ワッシャー、プラスチックの文字、金属のパイプ、鉄筋のリングなど、色々な素材を画面にコラージュしたあと、車の塗装に使用するウレタン系油性ペイントをスプレーガンによって色付けした作品です。

鉄筋のリングを画面より浮かせて取り付ける事によって出来た現実の影が支持体の平面とモデリングされた3次元的マチュールの存在感を際立たせ、その場を基準面としたとき、手前に迫り出す空間と画面表面より奥行きを感じる空間の融合を感じてみて下さい。



末永 正子
サクラとカゼ

ここ数年、ちょっとサクラに魅せられ制作しております。

今回もこのサクラから感じたイメージをベースに自然に共存している光や風・海や空などを自分なりの自由な発想と感性で、特に線と色を意識して表現したものです。

いつも、新しい自分発見の苦しい制作ですが、一瞬スーッと抜けていく、透明な気持ちにすくわれています。

今回、この作品を鑑賞して下さる皆様に、少しでも「サクラやかぜ」そして私を感じていただければ幸いです。



三浦 恭三
浮遊

近年、近くの川をさけが遡上してきており、傷つきよれよれになりながら流れに逆らって死力を尽くしてうごめくさけの姿は生々しい。やがて命が尽きそれが栄養になってまた新しい命が誕生する。まさに命の循環、生命を制作のテーマにしています。

一つ一つの形には特別の意味はありませんが形と形の関係（画面構成）を思考しました。緊張感の中に動きをもたせ、有機的な単純な形態が未来に向かって時間と空間を浮遊する生命のリズムを表現したいと思っています。そのことは自分が生きていることの証でもあるからです。



金森 美子
オハヨウ

私は、十数年前から「オハヨウ」というタイトルで絵を描いております。オハヨウの言葉は、英語でグッドモーニングと言うように、よい朝を持って下さい、よい朝になりますようにという気持ちが込められていると思います。太陽と共に毎日朝がやって来ます。みんなが希望のある朝を迎えてほしいのです。

今私は、高層マンションに囲まれた木造の家に住んでいます。去年の道展には、林立するマンションの間を散歩する老人を描きました。今回は、高層マンションに住む老人の気持ちを絵にしました。「オハヨウ、みなさん、お元気……」



北野 清子
秋思

ポプラに魅せられて、住に近いことも有り、長い間並木をテーマに描き続けて来ました。四季を通して、風と光と影を追い求めて、何作描いたか、かぞえ切れない枚数になっています。でももうやめるつもりでも時間をおくと又描きたくなるのです。近頃は小さな紙にエスキースしながら、テーマをしばり込むことばかり考え、テーマを浮上させ、それを確認するために、ポプラに憑かれております。今より深い表現を祈る心境です。



安田 祐三

冬晴れ〜サモア・シュール・セヌ〜

パリから南に80キロほど、列車で1時間弱の距離に在るサモア・シュール・セヌの町、直訳するなら「セヌ川沿いのサモア」ということになります。12月ともなると曇り空が続くことの多いフランス、全体的にグレーがかった景色になりがちですが、珍しく青空に恵まれ、森の木々や家々の屋根瓦の色が美しく引き立って見えます。森の向こうはフォンテーヌブローの森に続き、バルビゾンの村に至ります。川のこちら側の町エリシーに居を構える友人宅に、しばらくの間居候させてもらい、取材・スケッチしたものをもとに制作しました。



佐藤弘美子
祭風－濤 (2)

北海道を離れて33年になります。愛媛県新居浜市に住みながら祭りという文化に触れ、この感動はなんだろうか、このリズムに揺れる思いは何だろうかと過ごしてきました。萩の花が咲き、彼岸花が咲き、キンモクセイの香りと共に太鼓の音が響きます。金糸、銀糸で彩られた太鼓台が練り歩く10月16日から18日は、町が興奮に満ちている時です。今年は、この太鼓台が船に乗り瀬戸内海へ繰り出すイメージとを合わせ、私なりのテーマで描いてみました。



川井 坦
人形達の刻－譚

私の制作にとって、アジアは興味ある素材であると同時に、日本画の源流を考える事ともつながっています。

近年の制作の主題はアジアで、今回の作品もその中の連作の一点です。建物・宗教的遺跡群や風景の美しさもモチーフの一つとして描きますが、特に人形の持つ個性豊かな面白さはその国に生きる人たちに重なります。

私の部屋には多くの人形達が、私の不在を見計らい垣根をこえ語り合っています。写生を基とし人形達の声が表現されれば良いと思っています。



安栄 容子
静かな刻

野の草花たちを描いています。草むらの込み入った葉や花々です。

身近な場所に、ふと足を止め見入ってしまう景色があります。そんな場所に出会ったら、それを作品にします。光や風を描けたらと思い制作しています。その時に美しいと感じた気持ちを作品にしたいのです。

今回のモチーフは、稚内のメグマ沼を歩いて出会いました。何度か通った道ですが、その日は水辺に菖蒲たちが咲いている姿がなんとも美しく見入ってしまいました。そこだけがとても静かに刻が流れているように感じました。その光景に出会えたことに感謝です。



西本 久子
ふぁー

作品を見た人が、楽しく、明るくなるような、そして、心豊かで安らげる空間が作れるようにと思ひながら、制作しています。

日本に古くから伝わる絞り染めの一種、「嵐^{あらしほ}絞り」と言われている技法にヒントを得て、染色しています。

塩ビパイプに白いシルクの布を巻き、その上から糸を細かく巻きつけてから、布を押し縮め、パイプごと染料液に浸して染色します。染色後、乾かしてから糸をほどくと、プリーツが細かくはいた円筒形の布になっています。これに少し、手を加えているいろいろな表情にしてから、空間に浮遊させるのです。



渡辺 和弘
翠黎

この作品は『カシュー漆』という塗料を素材とし、漆工芸技法を用いて制作しています。『カシュー漆』の他、『螺鈿（アワビ貝殻）』『錫粉』等の素材も使用しています。

私は『線と色面の構成』をテーマに、『カシュー漆』の美しさをストレートに表現する事を主眼に置き作品制作をしています…この様な抽象表現の作品を発表していると必ず言われる事があります。それは『抽象の作品は、難しくてわからない』といった感想です。

私は、作品を鑑賞する際に必要な事は、作品を『感じる』事だと思っています。無理に作品を『わかる』必要はないのです。

抽象作品に限った事ではないのですが、作品を『感じて』いただけたら嬉しく思います。



毛利萬里子
懐

この作品は信楽の土3種類と北見の土でブレンドし、ひも作りで制作しています。この北見の土が気に入ってずっと作品の中に入れてあります。何となくふわっと柔らかな風合いに仕上がる様な気がします。

今回はシンプルに鉢を作りました。大きく包み込む様な形をめざし、単純な中に暖かさ、柔らかさを感じられるといいなと思ひながら作ってみました。自作の黒釉を霧吹きで吹き、線は灰釉で揺らしました。本焼2度の作品です。



竹内 博
黒の断面

木版で黒の単色刷りから作品づくりを始めたころ、光を意識した彫りで黒のベタにつなげていました。長くそんな彫りを続けていたせいか、黒のベタになんの違和感もありませんでした。

その後、しばらく多色刷りで黒のベタは使っていなかったのですが、近年、また使いだしたところ、とても気になり始めました。

それでは今回、黒のベタを前に出してつくり、あらためて考えてみようと思いました。

黒のベタに魅力を感じている私にとっては、大きなことだろうなあ～。



金沢 一彦
ワイ、ワイ

銅板に、研磨材を吹きつけて、キズのついた所にインクが入り込み、エッチングプレス機を通して、紙に写るといふ技法を使っています。題材は、大げさに喜んでいる人間を、極端にデフォルメして表現しています。こうすると自然と「人」という漢字に近づきますが、漢字には無い両手と頭が付いています。人である事と無関係な模様を描き込んで、抽象と具象の接点を探ってみました。2版2色刷りですが、一部に手彩色も使っています。



内藤 克人
計り知れないもの

ほかにも食べるものは沢山あるのに、どうしてもクジラが食べたいという日本人。牛や豚は平気で屠殺するのに、クジラだけは殺すな！と主張する欧米人。両者の主張は歩み寄る気配さえありません。

戦後、貴重なタンパク源としてクジラ肉で生き延びた日本人にとってクジラには特別な思い入れがあります。一方、知能の高さや雄大な姿に欧米人は神聖な何かを感じるのかもしれませんが。そんな特別な生物、クジラを「計り知れないもの」と題して描きました。



奥野 侯子
空

「空」と題して作品を発表してからどれ程になるでしょうか。

初めは構成上の一つの要素として登場した空も、気が付けば時間をかけて姿を変えて来た様に思います。

形ある物の力を借りて、目に見えないものを描き続ける作業の中で、空の無尽蔵な性格は私にとって有り難いものでした。

日々の出来事だけでなく、感情や思い・繋がりや結び付きが、其れによって時空を越えてくれる事。描き続けているのはそんなところにあるのかもしれませんが。

静かにそっと届きます様…。



奈良 昌美
オホーツク幻想

流水を描き続けて40年余りになりますが、温暖化の影響で年々流水の層が薄くなり、かつての荒々しく厳しい光景は見ることができません。最近では、長年目にしてきた流水野を思い浮かべながら構成していくことが多いです。

今年の作品は、今はもう幻の流水となりつつある中で、かつての厚い流水の姿を基に、気温の上昇でじょじょに水となって消え去っていく（春の日差しで円弧の内側のみならず円弧の外側へ雫となって消えていく）様相を表現したものです。

まだまだ未完成で鑑賞に耐えがたい段階です。



山川 恭子
緑径

昨年訪れた地を、自分なりにイメージし描いた作品です。一度しか訪れていない所でしたので、その時の空気を忘れないよう思い起こして制作し続けました。緑のトンネル（世界）をくぐった時のワクワクした気持ち。そして、トンネルの中からふと振り返った時の景色。それは、明るい日ざしの中に現れた、たった今通り過ぎて来た世界です。穏やかな時間の流れと、陽光を感じたひとときでした。

画面の中にこの時の出会いと、二つの世界を表現したいと思い描いています。